

穀物の国際価格上昇がわが国の農業生産に及ぼす影響

共生農業資源経済学講座 開発経済学分野

福田洋介

世界の穀物価格が均衡点を求めてさまよい続けている。1973年の穀物価格の高騰以降、シカゴ市場における穀物の中心価格は、1ブッシェル当たりで小麦が3ドル、トウモロコシが2ドル、大豆が5ドルであったが、バイオエタノール需要の増加、新興国需要の増加、異常気象、投機マネーの流入など複合的要因により穀物価格が高騰した。世界的な金融危機が世界同時不況を導き、穀物需要も同時に減少するとの見方が広がったことから歴史的な高値から急落したが、2010年1月時点でその価格は高値を維持したままである。2009年における価格は小麦が4~5ドル、トウモロコシが3~4ドル、大豆が10ドル前後であった。

穀物の国際価格上昇はわが国の食料事情に大きな影響を及ぼした。穀物価格の上昇が食料価格の上昇につながったのである。穀物の国際価格上昇が国内の食料価格に影響を及ぼした原因は主要な穀物を輸入に頼っていることにある。輸入が起こるメカニズムを部分均衡モデルで捉えれば、国内の需要曲線と供給曲線の交点として得られる均衡価格より国際価格が低いことに原因がある。シンプルな需給均衡モデルによれば、穀物の国際価格は需給均衡価格より低いいため、国際価格が上昇すれば輸入量が減少し供給曲線に沿って国内生産量が拡大する。したがって、輸入穀物価格の上昇は国内の穀物生産を上昇させるであろう。では、農業全体を視野に入れた場合、穀物の国際価格上昇は総農業生産を増加させることになるのであろうか。総農業生産が増加し、農業労働投入も増加するのであろうか。応用一般均衡モデルを利用して穀物の国際価格上昇が農業生産額、農業労働量に及ぼす影響を分析することが本稿の課題である。

本研究では「麦類」、「豆類」、「飼料作物及び雑穀」の国際価格が同時に上昇した場合の分析を行った。その結果、穀物の国際価格上昇が農業生産額及び農業労働量の増加をもたらすことが示された。わが国は農業生産額、農業労働力の両面で減少局面にあるが、穀物の国際価格上昇にはこの局面に変化をもたらす可能性があることを示している。したがって、穀物の国際価格上昇は国内農業を活性化させる外因と捉えることができよう。ただし、等価変分は負の値を示し家計の効用水準が低下することも同時に示されたことに注意が必要である。